Kodo=Araebisu Nomura Museum

野村胡堂・あらえびす記念館

令和４年度

館　報 22

館報 第22号

発刊にあたって

令和４年度は、野村胡堂生誕140周年の年となりました。新型コロナウィルスの感染状況を注視しながら、安心・安全を第一に、きめ細かく感染対策を講じることで、予定した事業を全て実施することができました。

第１回企画展では、「The GRAMOPHIL（ザ グラモフィル）～あらえびすと仲間たちが創った音楽雑誌～」として、音楽評論家「あらえびす」が発起人となり音楽愛好家の仲間たちと創刊したレコード専門の音楽雑誌『The GRAMOPHIL』（のちに『ディスク』）にスポットを当て、戦渦により廃刊を迎えるまでの歩みを紹介しました。クラシック音楽鑑賞の感動と喜びを、大衆へと広げるうえで、あらえびすが果たした大きな役割と、飾らない人柄に触れていただきました。

第２回企画展では、生誕140周年記念「胡堂とふるさと～わが郷土への郷愁（ノスタルジア）～」を開催しました。胡堂が幼少期を過ごした紫波町の大巻・彦部・日詰地域を中心に、生い立ちとふるさとの思い出、ふるさとにちなんだエピソードなどを紹介しました。関連事業として、記念対談「胡堂のふるさと」として、胡堂と縁（ゆかり）のある方々による対談を行いました。コーディネーターを交えたお三方による胡堂の思い出や当時の地域の様子は、とても懐かしく、参加された皆様は真剣に耳を傾けていました。

また、コロナ禍で２年間中止を余儀なくされてきた「野村記念講座」は、３年ぶりに開催することができました。感染防止策として時間を短縮したため、コンサートのみの開催でしたが、一流の音楽に、直に触れる貴重な機会となりました。

そのほかにもレコードコンサート・文章講座・胡堂塾・朗読会等、幅広い年代の方々に「胡堂・あらえびす」の業績をはじめ芸術文化にふれる機会を提供してまいりました。どの事業も例年と同様に実施することは難しく、さまざまな工夫とともに、ご参加の皆様にも協力をお願いいたしました。

今後も当館が調査・研究の場、児童・生徒の皆さんの学びの場、芸術文化にふれる場、憩いのひと時を過ごす場として、多くの方々に利用していただけますよう努めてまいります。

令和５年７月

野村胡堂・あらえびす記念館
館長　岩崎雅司

目　次

発刊にあたって

1　施設の概要・沿革 …… 1

2　令和４年度事業実績

⑴ 第38回野村記念講座 …… 2

⑵ あらえびすリレーコンサート …… 2

⑶ 講座・塾（あらえびす文章講座・胡堂講座・胡堂塾）…… 3

⑷ あらえびすレコードコンサート（名曲喫茶・出張・蔵出し） …… 3

⑸ あらえびすレコード定期コンサート …… 4

⑹ 企画展

第１回「The GRAMOPHIL（ザ　グラモフィル）
～あらえびすと仲間たちが創った音楽雑誌～」 …… 6

第２回　野村胡堂生誕140年記念
「胡堂とふるさと～わが郷土への郷愁（ノスタルジア）～」 …… 13

第２回企画展関連事業　野村胡堂生誕140年記念対談
「胡堂のふるさと」 …… 19

3　寄付者ご芳名 …… 21

4　入館者・歳出・レファレンス及び収蔵資料利用 …… 21

5　特定非営利活動法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会
令和４年度主な自主事業実績 …… 21

6　施設の利用案内 …… 22

施設の概要・沿革

⑴ 事業概要

基本構想	完了	平成４年　３月１０日
基本設計	完了	平成４年１１月３０日
建築工事等	着手	平成５年１２月１７日
建築工事	完了	平成６年１１月２８日
工事等	完了	平成７年　３月２８日

※一部展示工事等は平成７年５月２０日

⑵ 建物概要

敷地面積	１６，３６３．８７㎡
建築面積	１，２７６．０８㎡
のべ床面積	１，１０３．４１㎡

⑶ 施設概要

展示室１　ホール１　研究室１
収蔵庫３※　図書室１　読書室１　他

※内１はレコード収蔵庫（平成 24 年３月完成）

⑷ 工 事 費

基本設計	２０，０８５千円
用地測量、地質調査	３，９１４千円
実施設計・監理	４９，３３７千円
建築工事	４２８，４８０千円
駐車場整備	７，２１０千円
電気設備	５４，４８７千円
機械設備	７０，７６１千円
一般・映像展示	５３，３５５千円
案内標識、その他	１６，２１３千円
植栽(かたくりの丘含む)	１６，３１８千円
合計	７２０，１６０千円

⑸ 設計監理

基本設計	監修：吉武泰水
	製作：工藤卓､株式会社ディーシー
実施設計・監理	株式会社ディーシー
建築(駐車場含)	株式会社錢高組･株式会社小松組JV
電気設備	岩舘電気株式会社
機械設備	岩手水道土木株式会社
植栽工事	むつみ造園土木株式会社
一般展示	日精株式会社
映像展示	コセキ株式会社
測量地質調査	東開技術株式会社
地権者	佐藤豊　佐藤昇　橋本武三　三浦章

〔沿　革〕

年　月	事　項
昭和62年12月	野村胡堂顕彰施設建設懇談会開催（於：彦部地区）。胡堂顕彰施設建設に向けた組織作りが始まる。また、彦部地区野村胡堂顕彰会が発足。
昭和63年12月	東京高田馬場「喫茶あらえびす」馬淵巳三子氏よりレコードの寄贈受け、第１回あらえびすレコードコンサートを開催、以後定期的にレコードコンサート開催。
平成 元 年　7月	在京関係者と町関係者による野村胡堂・あらえびす顕彰懇談会開催(於:東京上野)
平成　2年　1月	野村胡堂の顕彰に係る懇談会を開催し、野村胡堂顕彰委員会設立の検討に入る。
平成　2年　9月	野村胡堂顕彰委員会の発足｡以後同委員会を随時開催､顕彰施設の建設の検討に入る。
平成　2年12月	野村胡堂顕彰委員会と彦部地区野村胡堂顕彰会が記念館建設について協議。
平成　3年　3月	彦部地区野村胡堂顕彰会が胡堂紹介パンフレット・小冊子作成、顕彰施設建設に向け活動する。
平成　4年　3月	野村胡堂記念館建設基本構想完成
平成　5年12月	野村胡堂記念館建築工事着工
平成　6年　6月	野村胡堂記念館開館準備室設置
平成　6年　7月	野村胡堂・あらえびす記念館開館準備実行委員会が発足。以後開館に向け開催。
平成　6年　8月	東京都教育研究所と所蔵レコードに関する協議。
平成　6年11月	野村胡堂･あらえびす記念館建築工事竣工
平成　7年　2月	東京都より野村レコード・コレクションの贈呈を受ける。
平成　7年　6月	野村胡堂・あらえびす記念館開館 第１回野村記念講座開催、以後定期的に記念講座開催。
平成　7年11月	野村胡堂・あらえびす記念館協力会が発足し、記念館管理運営へ協力開始。
平成　8年　4月	記念館受付・清掃業務を野村胡堂・あらえびす記念館協力会へ委託。
平成　8年　5月	「第16回東北建築賞作品賞」受賞
平成　8年10月	開館１周年記念「銭形音楽会」開催
平成12年10月	「あらえびすSP名曲決定盤」CDに復刻
平成16年　4月	開館10周年記念収蔵展「挿絵展」開催
平成16年11月	開館10周年式典開催 『野村胡堂・あらえびす来簡集』発刊
平成19年　3月	「あらえびすSP名曲決定盤第Ⅱ集」完成
平成21年　6月	開館15周年記念コンサート「穐吉敏子＆ルー・タバキンジャズコンサート」開催
平成22年　4月	野村胡堂・あらえびす記念館協力会が特定非営利活動法人化する。同法人へ記念館管理運営の一部を委託。
平成23年　1月	岡堂勝行氏より寄附金2000万円を受領
平成23年　4月	岡堂勝行氏よりレコード等約5000枚を受領
平成23年12月	レコード収蔵庫建築工事着工
平成24年　2月	「あらえびすレコード定期コンサート」が第200回を迎える。
平成24年　3月	レコード収蔵庫完成
平成24年　6月	岡堂コレクションレコード収蔵庫竣工式開催
平成24年10月	来館者25万人達成
平成26年　5月	『野村胡堂・あらえびす』発刊
平成26年　6月	開館20周年式典開催
平成28年　4月	指定管理者制度導入
令和 元 年　5月	来館者30万人達成
令和　2年　9月	「あらえびすレコード定期コンサート」が第300回を迎える。

第38回野村記念講座

野村記念講座とは、松田智雄（1911-1955・野村胡堂の娘婿）が構想を示し、当館が開館した平成７年以来、毎年、講演とコンサートを併せた形で、胡堂と縁のある東京藝術大学教授などが中心となり開催している講座です。

令和２年度と令和３年度は、コロナ禍のため開催を中止しました。令和４年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、講演会を行わず、コンサートのみ２時間以内のプログラムで開催しました。

第38回　野村記念講座

日　　時　令和４年10月16日（日）
　　午後１時30分～午後３時30分
会　　場　野村胡堂・あらえびす記念館ホール

コンサート出演者　桐山 建志（ヴァイオリン）
安成 紅音（ピアノ）
安藤 正輝（箏）
有森　博（ピアノ）
伊達 広輝（ピアノ）
掛谷 優太（ピアノ）

主　催　野村学芸財団岩手堂子会 / 野村胡堂・あらえびす記念館
入場者　70人

コンサート出演者
（左から有森、伊達、掛谷、桐山、安成、安藤）

演奏する左から桐山、安藤

あらえびすリレーコンサート

東京藝術大学器楽科有志と一般参加者によるピアノ音楽祭です。
コロナ禍のため令和元年、２年、３年と開催を中止し、４年ぶりの開催でした。
日　時　令和５年３月１１日（土）　午後１時３０分
会　場　野村胡堂・あらえびす記念館ホール
第１部　一般参加者によるコンサート　９組１２名参加
第２部　東京藝術大学器楽科有志によるコンサート　有森 博教授ほか３名
入場者　９９人

講座・塾

1　あらえびす文章講座

胡堂と同じ文筆家を目指す、または趣味のある方のために開催する講座です。

■小説コース　講師：平谷 美樹氏（小説家）
全５回（令和４年５月２１日～７月３０日）　受講者１２人

■エッセイ添削コース　講師：豊泉 豪氏（日本現代詩歌文学館学芸員）
全５回（令和４年６月９日～８月４日）　受講者１６人

■脚本コース　講師：道又 力氏（脚本家）
全３回（令和４年１１月５日～１１月２６日）　受講者４人

2　胡堂講座

■音楽は愉し　～朗読と音楽～
今年は第１回企画展の関連事業として、あらえびすの音楽評論の朗読に併せてＳＰレコードを蓄音機で鑑賞しました。
令和４年９月４日（日）
朗読：大塚 富夫氏（ＩＢＣ岩手放送アナウンサー）　受講者４６人

■胡堂生誕ギャラリートーク
令和４年１０月１５日（土）
講師：当館学芸員　　受講者５人

3　胡堂塾　ボランティアガイド養成講座

展示の詳しい解説やレコード鑑賞、生家見学を通して胡堂を身近に感じながら深く知る講座です。
講師：野村 晴一氏（胡堂の弟の孫）、当館学芸員
全５回（令和４年８月５日～９月３０日）　受講者８人

あらえびすレコードコンサート

1　名曲喫茶あらえびす

■春のテーマ「紫苑の園」
胡堂の娘で少女小説家の瓊子の作品から、作中で音楽が登場する場面の朗読とともに、作品にちなんだ曲を蓄音機で鑑賞しました。
令和４年５月５日（木・祝）
解説：当館学芸員　入場者３０人

■冬のテーマ「ドヴォルザークの郷愁」
あらえびすの名著『楽聖物語』の内容と第２回企画展「胡堂とふるさと」に展示している「故郷への旅」の内容に触れながら、郷愁を感じられる曲を蓄音機で鑑賞しました。
令和５年１月２８日（土）　解説：当館学芸員　入場者２６人

2　出張あらえびすＳＰレコードコンサート

令和４年１０月２６日（水）	盛岡市中央公民館	「盛岡わけもん College」	受講者　４人
	解説：当館学芸員		
令和４年１１月２３日（水）	盛岡てがみ館	「あらえびすのレコードコンサート」	受講者１５人
	解説：当館学芸員		
令和５年　１月１４日（土）	盛岡市上田公民館	「芸術文化講座」	受講者１８人
	解説：当館館長・学芸員		

3　蔵出し アナログ・レコードの時間

あらえびすホールにて、当館で収蔵しているＬＰレコードの中から、バロック／独奏・室内楽／協奏曲／管弦楽・交響曲／声楽・オペラの順に、選りすぐりの曲を鑑賞しました。
令和４年９月から５年３月まで毎週水曜日開催（２７回）　参加者４３３人
案内：当館館長

あらえびすレコード定期コンサート

第318回　クラシック名盤『楽聖物語』60　ワーグナー　4月17日(日)　解説員：侘美　淳

♪ジークフリート牧歌（指揮：ワルター、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）
♪楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』前奏曲（指揮：ムック、ベルリン国立歌劇場管弦楽団）
♪歌劇『タンホイザー』（指揮：ジェームス・レヴァイン、メトロポリタン歌劇場管弦楽団）

第319回　クラシック名盤『楽聖物語』61　ロッシーニ　5月15日(日)　解説員：岩崎雅司（当館館長）

♪歌劇『ウィリアム・テル』序曲（指揮：トスカニーニ、ＮＢＣ交響楽団）
♪歌劇『どろぼうかささぎ』序曲（指揮：森正、新日本フィルハーモニー管弦楽団）
♪歌劇『セヴィリアの理髪師』第１幕より抜粋（指揮：ミケーレ・マリオッティ、メトロポリタン歌劇場管弦楽団）
♪『スターバト・マーテル』より第２曲「悲しみに沈むその魂を」（テノール：ビョルリング、演奏：グレヴィリウス）

第320回　クラシック名盤『楽聖物語』62　懐かしの民謡・フォークソング名曲選　6月19日（日）　解説員：侘美　淳

♪別れ（テノール：タウバー）
♪サンタ・ルチア（テノール：カルーソ）
♪オオ・ソレ・ミオ（ソプラノ：三浦環）
♪カリンカ（ソプラノ：ライサ）
♪ヴォルガの舟歌（バス：シャリアピン）
♪カミン・スルー・ザ・ライ（ソプラノ：タリー）
♪蛍の光（アルト：クルプ）

第321回　あらえびすのレコードコンサート　東京帝大編Vol. 4　7月16日(土)　解説員：当館学芸員

♪グルック／舞踏曲集★　歌劇『アウリスのイフィゲニア』より（指揮：ダムロッシュ、ワシントンD.C.ナショナル交響楽団）★
♪ハイドン／オラトリオ『天地創造』より「大いなる御業は成りぬ」（指揮：サージェント、王立合唱団及びロンドン・フィルハーモニー管弦楽団）★
♪ハイドン／チェンバロ協奏曲　ヘ長調★　第１楽章
（チェンバロ：シャンピオン★、指揮：コッポラ★、ブリティッシュ交響楽団）
♪ハイドン／弦楽四重奏曲　ハ長調　作品76　第３番「皇帝」（プロ・アルテ弦楽四重奏団）★
♪ショパン／ 24の前奏曲　第15番　変ニ長調「雨だれ」（ピアノ：コルトー）
★は、あらえびすが選曲したプログラムと曲目または演奏者が一致するもの。

第322回　クラシック名盤『楽聖物語』63　ロマン派の先駆け・賢治の愛したベートーヴェン　8月20日(土)　解説員：侘美　淳

♪交響曲第６番　ヘ長調　作品68「田園」（指揮：ワルター、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）
♪インドの虎狩り　愉快な馬車屋（演奏：矢島光雄）

第323回　クラシック名盤『楽聖物語』64　ロマン派音楽の系譜　シューマン　9月18日(日)　解説員：侘美　淳

♪謝肉祭（ピアノ：コルトー）
♪ヴァイオリン協奏曲　ニ短調（遺作）（ヴァイオリン：クレーンカンプ、指揮：シュミット、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）

第324回　あらえびすのレコードコンサート　東京帝大編Vol. 5　10月23日(日)　解説員：当館学芸員

♪ウェーバー／舞踏への勧誘（ピアノ：コルトー）★
♪ロッシーニ／歌劇『セヴィリアの理髪師』序曲（指揮：スカニーニ、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団）★
♪メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲　ホ短調　作品64　第１楽章（ヴァイオリン：クライスラー、指揮：ロナルド、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団）★

♪メンデルスゾーン／オラトリオ「エリヤ」作品70　より　第39曲（ソプラノ：イゾベル・ベイリー、アルト：クララ・セレーナ、テノール：パリー・ジョーンズ、バリトン：ハロルド・ウィリアムズ、バス・バリトン：トム・パーヴィス、指揮：ロビンソン、B.B.C.合唱団および管弦楽団）★
♪プロコフィエフ／ピアノ協奏曲第３番　ハ長調　作品26　第１楽章　アンダンテ－アレグロ（ピアノ：ユジャ・ワン、指揮：クラウディオ・アバド、ルツェルン祝祭管弦楽団）
★は、あらえびすが選曲したプログラムと曲目または演奏者が一致するもの。

第325回　クラシック名盤『楽聖物語』65　11月20日(日)
ロマン派音楽の系譜　ブラームス　解説員：侘美　淳

♪ハンガリー舞曲第１番（指揮：クラウス、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）
♪ハンガリー舞曲第２番（ピアノ：バックハウス）
♪ハンガリー舞曲第５番（指揮：フィドラー、ボストン・ポップスオーケストラ）
♪ハンガリー舞曲第６番（指揮：フィドラー、ボストン・ポップスオーケストラ）
♪ハンガリー舞曲第７番（ピアノ：パデレフスキー）
♪ホルン三重奏曲　変ホ長調　作品40（ホルン：ブレイン、ピアノ：ゼルキン、ヴァイオリン：ブッシュ）

第326回　クラシック名盤『楽聖物語』66　12月18日(日)
クリスマスにちなんで　解説員：侘美　淳

♪グルーバー／きよしこの夜
♪アダン／クリスマスの歌
♪レーガー／マリアの子守歌
♪フンパーディンク／クリスマス
♪フランシス・レイ／オーベルビリエのノエル
♪荒野のはてに（讃美歌）
♪神の御子は今宵しも（讃美歌）
♪バッハ／クリスマス・オラトリオ　BWV248（指揮：シギスヴァルト・クインケン、管弦楽＆合唱：ラ・プテット・バンド）
胡堂のディスク・オルゴール〔明治40年ドイツ製〕
♪ドイツ国歌
♪オールド・ラング・ザイン（スコットランド民謡）
♪きよしこの夜（讃美歌）

第327回　クラシック名盤『楽聖物語』67　1月15日(日)
ロマン派音楽の系譜　ドヴォルザーク　解説員：侘美　淳

♪序曲「謝肉祭」（指揮：ターリッヒ、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団）
♪スラブ舞曲第２集　作品72より　第１番、第２番、第３番（指揮：ジョージ・セル、クリーヴランド管弦楽団）
♪弦楽四重奏曲第12番「アメリカ」作品96（ロート弦楽四重奏団）

第328回　クラシック名盤『楽聖物語』68　2月19日(日)
ロマン派音楽の系譜　解説員：侘美　淳

♪シューマン／ヴァイオリン・ソナタ第１番　イ短調　作品105（ヴァイオリン：ブッシュ、ピアノ：ゼルキン）
♪メンデルスゾーン／交響曲第４番　イ長調　作品90「イタリア」（指揮：クーゼヴィツキー、ボストン交響楽団）

第329回　クラシック名盤『楽聖物語』69　3月19日(日)
ロマン派音楽の系譜　解説員：侘美　淳

♪ファリャ／バレエ音楽「恋は魔術師」火祭りの踊り（指揮：フィドラー、ボストン・ポップスオーケストラ）
♪ファリャ／バレエ音楽「恋は魔術師」火祭りの踊り（ピアノ：ルービンシュタイン）
♪ファリャ／バレエ音楽「恋は魔術師」恐怖の踊り（ピアノ：ルービンシュタイン）
♪ファリャ／ハープシコード協奏曲（ハープシコード：ファリャ、フルート：モイーズ、オーボエ：ボヌー、クラリネット：ゴドー、ヴァイオリン：ダリュー、チェロ：クルーゲ）
♪ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第２番　ハ短調　第１楽章（ピアノ：ラフマニノフ、指揮：ストコフスキー、フィラデルフィア管弦楽団）
♪ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第２番　ハ短調（ピアノ：ハオチェン・チャン、指揮：ヤニック・ネゼ・セガン、フィラデルフィア管弦楽団）

入場者（４月～３月）４５２人

企画展（第１回）

The GRAMOPHIL（ザ　グラモフィル）
～あらえびすと仲間たちが創った音楽雑誌～

あらえびすの活動をさらに深く知るために、あらえびすが発起人となり、中心となって執筆した音楽雑誌『The GRAMOPHIL〔ザ・グラモフィル〕』（のち『disques〔ディスク〕』に改題）について取り上げた。

この雑誌は、昭和５（1930）年に同人雑誌として創刊し、多くの愛読者に恵まれたが、昭和16（1941）年太平洋戦争の影響によって終刊した。短い間だったが、雑誌刊行のほかレコードコンサートの開催など意欲的な活動を続けた。掲載の評論記事は、あらえびすをはじめとする音楽評論家たちの情熱が感じられ、多くの人から支持された。

今展では、音楽雑誌の幅広い活動を紐解くとともに、SPレコード蒐集にとどまらず雑誌創刊にまで至った、あらえびすの徹底した音楽趣味の世界に目を向けることを目的とした。

開催期間　６月14日（火）～９月30日（金）　94日間

入場者数　624人

来場者の声

・２回目の見学でしたが、新たな発見が多くありました。（50代、男性）
・展示に出てくる曲を、何曲か聴く事ができたらと思いました。どんな曲なんだろう？と興味が出て来たので。当時のレコード熱が伝わってくる良い展示でした。（30代、男性）
・あらえびすが音楽評論家として友人や後輩たちに敬意を払われていたことがよく分かる展示でした。（40代、女性）

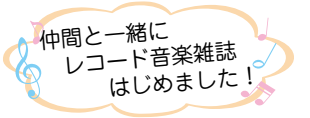
はじめに　～音楽評論家あらえびすの誕生

明治末期、胡堂の学生時代は、クラシック音楽に触れるためには、日比谷野外音楽堂で行われる軍楽隊の演奏を聴きに行くほかなく、それを何よりの楽しみにしていた。

明治45（1912）年５月、報知新聞社に入社した胡堂は、給料をもらうと、クラシック音楽のＳＰレコードを買い集めるようになった。

大正11（1922）年、ピアニストのゴドウスキーが来日し、帝国劇場で演奏会を開催した。当時、新聞社で調査部長兼学芸部長に就いていた胡堂は、「ゴドウスキーを聴くの記」という見出しの評論記事を報知新聞紙上に書いた。このとき、胡堂の「胡」と同じ意味を持つ「あらえびす」の名を初めて使った。

同年12月12日に発行された音楽雑誌『近代音楽』12月号（近代音楽社）には、「ゴドウスキー合評」が掲載され、小倉末子（ピアニスト）、弘田龍太郎（作曲家）、萩原英一（ピアニスト）ら音楽の専門家に交じって、「あらえびす」の名でゴドウスキーの演奏について批評を寄稿している。*「見事なタツチに眼を見張つて居ると、豊麗ないきいきした音が、美しいトーンを画いて水のやうに流れて行くのです。（略）次に来るといふ、パテレウスキーを聴いて比較して見たいものであります」*と述べている。演奏会の感想だけにとどまらず、演奏の内容、他の演奏家との比較まで踏み込んでおり、音楽評論家としての萌芽を感じる。



音楽評論家あらえびす

大正12（1923）年、胡堂はベートーヴェンの交響曲第９番のレコードが初めて日本に輸入されることを知り注文、翌年13（1924）年６月に友人２人と自宅の蓄音機「チニー」で聴いた。胡堂は、第９番を含めたベートーヴェンの９つの交響曲を聴いた感動を、「日本で聴かれる九つの交響楽　英仏独米のレコードからベートーヴェンものをあさりて」という見出しで、７月６・７日の２日間にわたって報知新聞紙面に掲載した。記事の内容は、レコード会社別の録音状況とともに、「歓喜の歌」として有名な交響曲第９曲（合唱付き）第４楽章について*「最初に出て来るバリトンの見事さ、それに続く歓喜の歌の大波は、高調せる感情にどよみを打たせて更に高く高くと、歓喜の絶頂に導かずに措きません。真に人間の作れる芸術の最高殿堂とはこれを言うのでしょう」*と、熱を帯びた語り口調で述べている。

クラシック音楽とレコード紹介が読者から好評を博し、同年８月からコラム「音楽漫談ユモレスク」の連載を開始した。ここから音楽評論家「あらえびす」としての歩みが始まったのである。

『The GRAMOPHIL』の誕生

大正、昭和期のレコード店は、音楽愛好家たちの社交場であり、青木謙幸（本名誠意）が経営する銀座西五丁目の「サイセリア蓄音機店」には、胡堂をはじめ、中村善吉、森潤三郎、仙石襄、深谷甫、西条卓夫、堺和昌夫、藤田不二ら音楽愛好家たちが自然と集まり交流を深めていた。

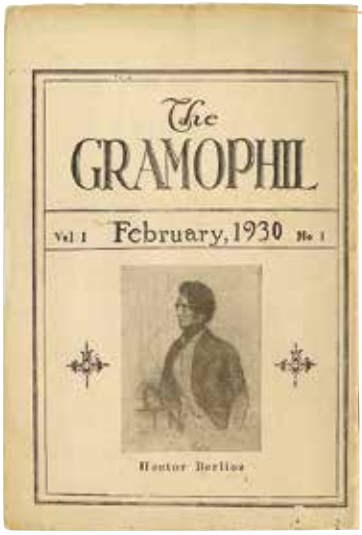
昭和５（1930）年、胡堂が青木にレコード専門の音楽雑誌を作ってはどうかと提案した。同じ頃、森も青木に雑誌創刊の提案をしていた。胡堂も執筆者のひとりとなる約束をし、発刊を決定。青木は出版のためにグラモヒル社を創立し、自身は社長を務め、弟の青木実が初代編集長に就いた。

雑誌名は、森潤三郎の発案で蓄音機を意味する「グラモフォン」と「フィル」をあわせた造語で、「レコード愛好家」の意味を持つ「The GRAMOPHIL」とした。そして、同年２月10日、レコード音楽愛好家による同人雑誌『The GAMOPHIL』第１巻第１号が創刊された。本誌最初の記事は、あらえびすの連載「レコードの選び方（一）　新たに斯道に入る人の為に」である。

国内にレコード会社が複数誕生した日本レコード産業の草創期に、レコード専門の音楽雑誌は珍しく、多くの人の注目を集めた。日本ビクターや日本コロンビアの洋楽部は、レコード専門の音楽雑誌ができたことを大いに喜んだという。

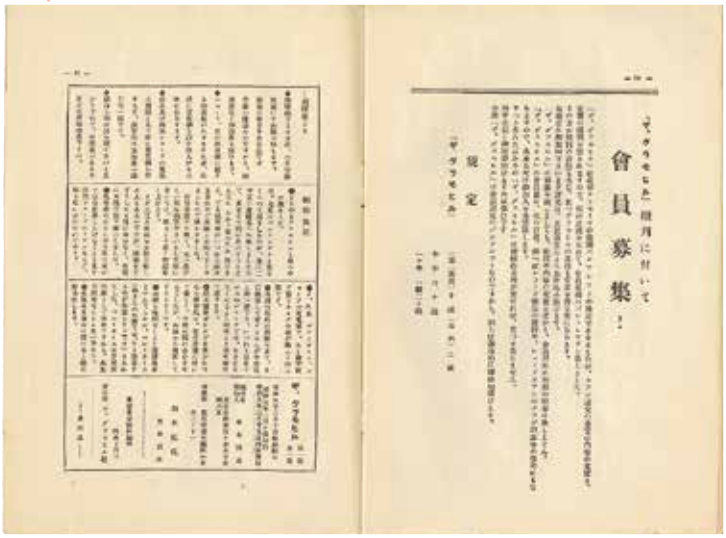
創刊当時、レコード批評欄には専任の執筆者が決まっておらず、同人が手分けして担当していた。執筆者のあいだではペンネームが流行り、「烏頭魔気（堺和昌夫）」、「久礼伝三（西城卓夫）」、「倉部讃（有坂愛彦）」など、蓄音機や音楽にちなんだペンネームが使われいた。胡堂は「あらえびす」のほかに「位鈴」というペンネームを使うこともあった。

雑誌は購読会員制だったが、報知新聞のコラム「音楽漫談ユモレスク」に本誌が紹介されると、すぐに1,200人余りの購読申込みがあった。同年５月12日、読者を対象に本誌主催の第１回レコードコンサートが、報知講堂で行われた。「ベートーヴェンとフランクの夕べ」と題し、海外から入りたての新譜レコードを鑑賞したこのコンサートは、来場者が500人に及び絶賛を博したという。その後、本誌主催のレコードコンサートが毎月開催された。



創刊号の表紙絵は
作曲家であり評論家としても活躍した
ベルリオーズ！

編集後記
「執筆者のあらえびす氏に付いては
申し上げなくとも洋楽レコードのファン
でしたら知らない方はないでせう」



『The GRAMOPHIL』第１巻第１号　創刊号　昭和５（1930）年３月15日（再版）

『disques』への改名とさまざまな紙面

雑誌名『The GRAMOPHIL』は、名称が分かりにくいということで、昭和５（1930）年９月号（通算８号目）から『disques（ディスク）』と改名した。胡堂は、雑誌名を変えることに最後まで反対したという。「disques」は、フランス語で「円盤」「レコード」を意味する。

昭和６（1931）年、創刊２年目には新たな執筆者を迎え、紙面を充実させていく。ディスクならではのひとつに「海外ニュース」や「海外新譜紹介」などのコーナーがある。これは、本誌の海外派遣記者による海外の音楽事情や新譜レコード情報の記事である。この情報をもとに、同人はレコードを海外から予約購入し、本誌でその感想を述べ、一般読者はその批評を参考にした。ときには、日本で未発売のレコードを誌上で紹介したため、日本のレコード会社を焦らせてしまったこともあるという。

後年、ディスクのレコード批評記事に対し、抗議を受けたことがあったが、これによって批評の態度を崩すことはなかった。この姿勢がディスクに対する読者の信頼を得ることになった。

昭和７（1932）年には、胡堂の似顔絵入りで「漫談風に―　私の好きなレコード」の連載が開始される。２月から９月までの全８回。胡堂は*「私は音楽家でも音楽批評家でもない、レコード、コレクシヨンに没頭する一の道楽者に過ぎません。（略）レコードに依つて音楽を味ひ、それを生活の潤ひとする素人の為に、文字通りな漫談を試みたばかりですから」*と語り、作曲家たちを語るほか、よく聴くレコードや好きなレコードの紹介、学生時代の苦労話もあり親しみやすい内容だった。

同年、愛読者が支部を作り東京、山形、大阪に「ディスク倶楽部」が誕生。独自にレコードコンサートを開催し、読者同士の交流を深めていた。時には胡堂ら本誌主筆らが地方に招聘されて講演を行うこともあった。翌年には、関東各地はもとより、東北地方や中国地方にも倶楽部が誕生、その後も増加し続けた。毎号本誌に掲載される「ディスク倶楽部便り」には、各支部の活動報告や開催レコードコンサートのプログラム、使用したレコードが掲載された。日本全国のディスク倶楽部の情報交換が誌上で行われた。

そのほか、胡堂や中村善吉を中心に「国際レコード鑑賞会」という会員制の鑑賞会が誕生。この会の方針は「レコード会社にもレコード雑誌にも属せず、全く厳正中立の態度を持して活動する」としている。第１回コンサートは昭和7（1932）年3月15日に開催された。

昭和10（1935）年10月には、ディスク主催の写真展「欧米音楽家の写真展覧会」を銀座資生堂ギャラリーにて開催。海外派遣記者の加藤鋭五氏が入手した写真を一斉に展示した。

「ディスク倶楽部」便り
『レコード音楽雑誌　ディスク』４月号（昭和７年）掲載

ディスク誌主催　第４回レコードコンサート　報告記事
『レコード音楽雑誌　ディスク』11月号（昭和６年）掲載

あらえびす「私の好きなレコード（五）」
『レコード音楽雑誌　ディスク』７月号（昭和７年）掲載

『ディスク』の円熟期と『珍品レコード』

同人たちによるさまざまな連載や寄稿記事数も増え、ディスクは円熟期を迎える。レコード紹介欄に挿絵が付き、クラシック部門のみならず「ポピュラー・セレクション」「ダンス・レコード評」などの項目も増えた。

昭和10（1935）年から始まった「ディスク懸賞論文」の募集は、新人音楽評論家の登竜門とする意図があり、多くの募集のなかから、毎年４名ほどが選出された。

この頃、一年間で最も優秀なレコードをディスク同人が選ぶ「ディスク賞」の選定を行った。これは、昭和７（1932）年の誌上で紹介した、フランスの音楽雑誌が主催した「ディスク大賞」に倣った企画である。初めはディスク執筆者による選定だったが、後に読者アンケートを行い、それを反映させた年間ディスク賞レコードを選定するようになり、レコード界は大いに賑わいをみせた。

昭和14年（1939）、胡堂は『名曲決定盤』（中央公論社）を発行した。表紙には「よき曲　よき演奏　よき録音」とあり、レコードで音楽を鑑賞するための最良の１枚を、演奏者ごとに紹介した。序文には「*三十年近い道楽の総決算として、良いものは良い、悪いものは悪いと言い切って、紹介主義から、厳選主義に入らなければならぬ。（略）非常に忙しい私が一年の歳月を費して、この書を綴ったのは、この総決算をしたいためであった*」と記す。たった１枚のレコードを求める人のために書いたこの音楽評論書は、レコード音楽愛好家だけでなく、音楽へ関心を持つ初心者の指針となった。

一番活動が盛況だったのは昭和15（1940）年だったと、青木は振り返っている。日本各地の「ディスク倶楽部」はますます増加し、小石川、王子、湘南、福岡、姫路、長野、高知、宇都宮、名古屋、佐世保、長崎、青森、岡谷、小樽、大原が加わった。最終的に60ヶ所にディスク倶楽部が誕生したという。

この年、アコースティックレコードの集大成といえる『珍品レコード』（グラモヒル社）を限定1,000部で発行した。胡堂（あらえびす）、中村善吉、藤田不二、山口亀之助、青木謙幸による共著で、当時高級だったフルカラー印刷を用いた写真のページや、高級感のある装丁からも、執筆者たちの力の入れ具合がうかがえる。主に電気吹き込み以前の珍品といわれる貴重なレコードについて、各々が語っており、同年のディスク7月号には『珍品レコード』への感想が多数寄せられた。

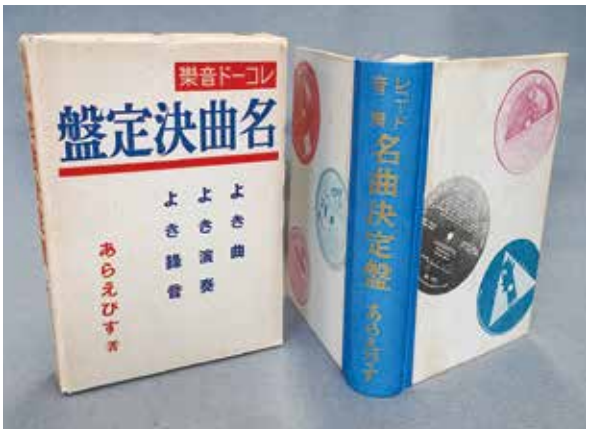
「ディスク賞レコード選定」は
フランス音楽雑誌の企画を参考に実施。
レコード愛好家たちは大盛り上がり！

第四回ディスク賞レコード選定

「ディスク鑑賞論文」の募集は
新人音楽評論家を発掘する
意図がありました。

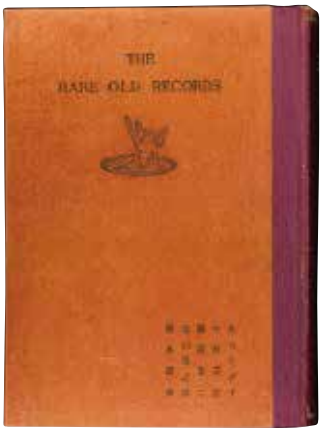
第四回ディスク懸賞論文募集

『洋楽レコード専門雑誌　ディスク』12月号（昭和13年）掲載



あらえびす著『名曲決定盤』
昭和14（1939）年５月３日発行（中央公論社）

『珍品レコード』広告
『洋楽レコード専門雑誌　ディスク』７月号（昭和15年）掲載



『珍品レコード』あらえびす、中村善吉、
藤田不二、山口亀之助、青木謙幸共著
昭和15（1940）年５月15日発行（グラモヒル社）

『レコード文化雑誌　ディスク』終刊へ

昭和16（1941）年、日本国内では敵性語を排除する運動がおこり、アルファベット表記の雑誌名が『洋楽レコード専門雑誌　DISQUES（ディスク）』から『レコード文化雑誌　ディスク』となった。

愛読者のなかには出征した者もおり、戦場から「露営の夢はレコード」という切々たる声が届いた。ディスクは慰問レコードを募集し、ディスク倶楽部やレコード会社、胡堂ら個人からもレコードを集め、491枚を満州や海軍基地、病院などに送っている。

戦争に向けた国策で、紙の使用制限を目的とした第一次音楽雑誌統合令により、昭和16（1941）年10月号の第13巻通算146号で『ディスク』は廃刊を迎えた。

主幹の青木謙幸は、廃刊の辞を次のように述べている。*「思へば本誌が歩み続けて来たこの十数年は我国のレコード文化の最も絢爛たる一時代でありました。今日程レコードが音楽の普及に大きな役割を演じた時はなく、又今日程好楽家の鑑賞力の培養された時代も無かつたと思ひます。この事を思ひ、又我国の未曽有の国難を思へば一ディスクの廃刊の如きは洵（まこと）に些々（さささ）たることで、昨年来いつでも喜んで国策に殉ずる用意を致して居りました。廃刊届を呈出（ていしゅつ）して来た今日、流石（さすが）に「ディスク」に対する個人的な感慨も無きにしも非らずですが、それよりも今は新体制下の音楽文化に対し、非才（ひさい）ながら如何（いか）にしたらお役立ち出来るかと云ふ念願で一ぱいであります。」*

編集後記には、当時の編集長の柏木俊三が、雑誌統合について*「足らざるところを相補ひ、良き点を貸し合つて、日本に於けるレコード文化の一大発展を期するといふ一等大きな何よりも光栄ある仕事に向かつて第一歩を踏み出したとも考へられぬ事はない」*と述べた。最後に、*「『デイスク』は沢山のいい読者を持つていた。いい読者とは何か、それは編集者にまでも働きかけて来る読者の事だ。（略）無言の、而（しか）も理解と鞭撻と警告に充ちた目、それを編集者に感じさせる読者だ。（略）私の願ひはさういふ読者の方々に新雑誌をも大いに読んで頂き度い」*と語った。

『ディスク』は、同様にレコードに関する記事を掲載していた雑誌『レコード音楽』『レコード』と合併し、新たに『レコード文化』として再出発した。その際、編集は青木謙幸、経営は『レコード音楽』（名曲堂）の比良正吉が受け持った。しかし、それも長くは続かず、戦争が激化した昭和18（1943）年、第二次音楽雑誌統合令により『レコード文化』を含む、当時存在した全ての音楽雑誌が廃刊となった。

本誌の廃刊と新雑誌の創刊に就いて（共同声明）

『レコード文化雑誌　ディスク』第13巻第10月号　終刊号
昭和16（1941）年10月１日発行

青木謙幸「ディスク廃刊に際して」

あらえびす
「レコード蒐集読本　一枚から一千枚まで（十九）優秀レコード一束」

『ディスク』の復刊

戦渦に巻き込まれ、『ディスク』が廃刊してから10年後の昭和26（1951）年、青木謙幸、藤田不二を中心に集まった同人の間で、雑誌復刊の声が上がった。青木が胡堂の自宅を訪ね、このことを話すと胡堂は大いに喜んだ。

復刊号は同年９月１日、戦前の刊行から数えて通算147号として刊行した。胡堂は復刊の際、*「『ディスク』は容易に再刊されそうにもなかったが、人の和と、時の利は早くも準備を整へ、青木氏の熱心なる活躍が実を結んで、ここに復刊第一号を出したのは、何んとも喜びに堪えないことである」*と寄せた。

昭和５（1930）年に『The GRAMOPHIL（ザ グラモフィル）』として出発し11年間続いた『ディスク』は、青木謙幸、実兄弟と、胡堂をはじめとする筆の立つレコード音楽愛好家たちや日本全国の愛読者の情熱に支えられてきた。音楽評論家の堀内敬三は*「レコード愛好者を培養することは、ほとんど『レコード音楽批評家』たる人々によってなされた。野村あらえびす（小説家、野村胡堂）・野村光一・藤田不二・青木謙幸・中村善吉などがその主たるもので、この人々が高尚な趣味をレコード愛好者に与え、正しい批評によって方向を示した功は大きい」*（『音楽明治百年史』）と述べている。ここに挙げられた人物はみな、『The GRAMOPHIL』改め『ディスク』の同人たちであった。

『The GRAMOPHIL』同人の集合写真
昭和５（1930）年４月５日
前列右から２番目があらえびす

『レコード音楽雑誌　ディスク300号記念特大号』
第25号第９号　10月号
昭和37(1962)年10月１日発行　グラモヒル社

関連イベント

胡堂講座朗読会　音楽は愉（たの）し　－朗読と音楽－

令和４年９月４日（日）　午後１時30分～３時

今年も大塚富夫さん（ＩＢＣ岩手放送アナウンサー）による朗読会を開催しました。

例年は野村胡堂の代表作『銭形平次捕物控』のなかから一作品を朗読していますが、今回は企画展関連事業として、あらえびすの音楽評論や随筆の朗読とともに、内容にちなんだ曲のＳＰレコードを蓄音機で鑑賞しました。朗読と音楽のコラボレーションで、クラシック音楽を愛する胡堂に親しみを感じることができました。朗読会終了後は、企画展担当学芸員が展示の解説をしました。

第１回企画展　「The GRAMOPHIL ～あらえびすと仲間たちが創った音楽雑誌～」展示目録

No.	資　　料　　名	年　　代	備　　考
1	『The GRAMOPHIL(ザ・グラモフィル)　第１巻第１号』 創刊号	昭和５(1930)年３月15日再版	グラモヒル社 初版２月10日発行
2	『レコード音楽雑誌　ディスク　第３巻第11号　11月号』 あらえびす「珍品レコード是非」	昭和６(1931)年11月４日発行	グラモヒル社
3	『レコード音楽雑誌　ディスク　第４巻第２号　２月号』	昭和７(1932)年２月１日発行	グラモヒル社 「私の好きなレコード（一)」掲載
4	あらえびす著　『音楽史的レコード蒐集（上）バッハからシューベルト』	昭和７(1932)年４月10日再版	名曲堂 奥付筆者名「野村長一」 初版４月１日発行
5	野村光一書簡　野村胡堂宛	昭和７(1932)年４月14日	京文社「世界音楽体系」 原稿用紙１枚
6	『レコード音楽雑誌　ディスク　第４巻第４号　４月号』 「海外新譜紹介」	昭和７(1932)年４月１日発行	グラモヒル社 「私の好きなレコード（三)」掲載
7	『レコード音楽雑誌　ディスク　第４巻第６号　６月号』 「サロン・ディスク」	昭和７(1932)年６月１日発行	グラモヒル社 「私の好きなレコード（四)」掲載
8	『レコード音楽雑誌　ディスク　第４巻第７号　７月号』 「第二回『ディスク大賞』の発表」	昭和７(1932)年７月１日発行	グラモヒル社 「私の好きなレコード（五)」掲載
9	『レコード音楽雑誌　ディスク　第４巻第８号　８月号』 あらえびす「漫談風に―　私の好きなレコード（六)」	昭和７(1932)年８月１日発行	グラモヒル社 「私の好きなレコード（六)」掲載
10	『レコード音楽雑誌　ディスク　第４巻第９号　９月号』 あらえびす「漫談風に―　私の好きなレコード（七)」	昭和７(1932)年９月１日発行	グラモヒル社 「私の好きなレコード（七)」掲載
11	『レコード音楽雑誌　ディスク　第４巻第10号　10月号』 あらえびす「漫談風に―　私の好きなレコード（八)」	昭和７(1932)年10月１日発行	グラモヒル社 「私の好きなレコード（八)」掲載
12	川口松太郎書簡　野村胡堂宛	昭和８(1933)年４月７日	便箋１枚
13	『洋楽レコード専門雑誌　ディスク　第10巻第12号 12月号』　口絵「トスカニーニとN.B.C交響楽団」	昭和13(1938)年12月１日発行	グラモヒル社
14	野村あらえびす　講演「コロムビア世界音楽名盤集 第三集に就いて」(解説書)	昭和14(1939)年発行	日本コロンビア社
15	ＳＰレコードアルバム コロムビア世界音楽名盤集　第三集	昭和14(1939)年	日本コロンビア社 12インチ盤　12枚組 あらえびすコレクションＳＰレコード
16	あらえびす著　『名曲決定盤』	昭和14(1939)年５月３日発行	中央公論社 奥付筆者名「野村長一」
17	野村光一書簡　野村胡堂宛	昭和14(1939)年５月10日	葉書
18	堀内敬三書簡　野村胡堂宛	昭和14(1939)年５月18日	便箋２枚
19	『洋楽レコード専門雑誌　ディスク　第11巻第９号 ９月号』　あらえびす「レコード蒐集読本　一枚から 一千枚まで（五)」	昭和14(1939)年９月１日発行	グラモヒル社
20	あらえびす、中村善吉、藤田不二、山口亀之助、青木謙幸 共著　『珍品レコード』	昭和15(1940)年５月15日発行	グラモヒル社
21	ＳＰレコード　「ロンド・デ・ルタン（妖精の踊り)」 演奏：クーベリック（ヴァイオリン)	明治38(1905)年	フォノティピア・レコード社 11インチ盤 あらえびすコレクションＳＰレコード
22	大沼魯夫書簡　野村胡堂宛	昭和15(1940)年６月３日	葉書
23	『洋楽レコード専門雑誌　ディスク　第12巻第７号 ７月号』「珍品レコードに対する感想」	昭和15(1940)年７月１日発行	グラモヒル社
24	『レコード文化雑誌　ディスク臨時増刊　ベートーヴェン　特集号』　あらえびす「ベートーヴェンの生涯」	昭和16(1941)年９月20日発行	グラモヒル社
25	『レコード文化雑誌　ディスク　第13巻第10号　10月 号』　終刊号 あらえびす「レコード蒐集読本　一枚から一千枚まで (十九)　優秀レコード一束」	昭和16(1941)年10月１日発行	グラモヒル社 連載打ち切り
26	『レコード音楽雑誌　ディスク　第25巻第９号　10月号 300号記念特大号』	昭和37(1962)年10月１日発行	グラモヒル社

※旧字体は、適宜新字体に直しました。
※所蔵者名の無記載は、野村胡堂・あらえびす記念館の所蔵資料です。

企画展（第２回）

野村胡堂生誕140年記念
胡堂とふるさと ～ わが郷土への郷愁（ノスタルジア） ～

明治15（1882）年10月15日、紫波郡大巻村（現紫波町大巻）に野村胡堂が誕生した。令和４（2022）年は野村胡堂生誕140年にあたり、胡堂を幅広い世代に知ってもらうため、記念企画展として実施した。

今展では、胡堂が幼少期を過ごした紫波町の大巻・彦部・日詰地域を中心に、胡堂の思い出を振り返り、ふるさとにちなんだエピソードや場所を紹介した。また、大正９（1920）年に胡堂一家が帰郷した際の記録「故郷への旅」を展示の中心に据え、ふるさとの人々との交流や胡堂・ハナ夫妻のふるさとへの思いに触れる展示を実施した。

開催期間　11月15日(火)～令和5年3月19日(日)　101日間
入場者数　627人

来場者の声

・当時の様子がよく分かり､実際に胡堂さんたちと旅をしているような気分になりました｡当時の地図も写真もあり､大変分かりやすかったです。胡堂さんの日記､スケッチをじっくり見てしまいました!! ありがとうございました。（40代、女性）
・手紙、ハガキなど、わかりやすく表示していたのでよくわかりました。よかったです。（70代、男性）
・彦部村の地理が分かりやすく紹介されていた点に興味を持ちました。彦部村と胡堂にしぼった展示もみてみたいです。蔵書印、衝立も良い。「故郷への旅」は全文読みたくなりました。（40代、男性）
・丁寧な解説が分かりやすかったです。故郷を離れたあとも、胡堂にとってふるさとは特別だったことが豊富な資料から分かりました。（30代、女性）

胡堂が生まれ育ったふるさと

胡堂が生れた岩手県紫波郡大巻村（現在の紫波町大巻）は現紫波町の東部に位置し、集落の西を流れる北上川による肥沃な土壌から、古くから稲作が盛んな地域である。

野村家（屋号「長沢尻」）は大巻の長沢尻集落の中では歴史の長い家で、代々農業を生業としている。

野村胡堂（本名長一（おさかず）※以下胡堂と表記する）は､明治15（1882）年10月15日に野村長四郎・マサ夫妻の息子として生を受ける。

明治20（1887）年、胡堂は彦部尋常小学校に入学する。明治24（1891）年に同校を卒業、日詰にあった紫波高等小学校へ進学する。大巻・彦部地域の人々が北上川対岸への身近な移動手段としていたのが赤石渡船場の渡し船で、胡堂もこれを使い紫波高等小学校へ通学していた。幼少期の胡堂は大人しく無口な子どもだったため、「いじめられっ子」だったが、土蔵で読み漁った父の蔵書から覚えた物語を、高等小学校の下校の最中に友人たちへ語って聞かせ、人気者になったというエピソードが残っている。

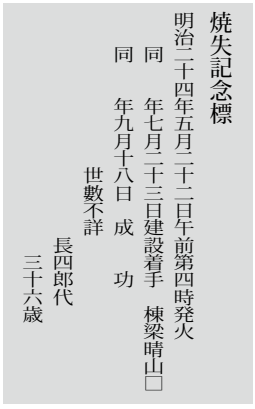
胡堂は明治29（1896）年に紫波高等小学校を卒業、盛岡にある岩手県尋常中学校（後に盛岡中学校と改称）へ進学する。

野村胡堂生家　左上　昭和11（1936）年頃
右下　令和４（2022）年

野村胡堂画「生家土蔵」
大正12(1923)年8月9日

彦部尋常小学校卒業証書
明治24（1891）年４月10日付

紫波高等小学校卒業証書
明治29（1896）年３月30日付



焼失記念標　明治24（1891）年
明治24(1891)年５月22日、母屋横の物置小屋からの不審火により、自宅が火事で全焼。この火事及び自宅再建の記録として、長四郎が火災で焼け残った木材を利用し制作したもので、裏面は焼け焦げ、炭状になっている。

車長持ち
底に車輪がついているため、持ち出しに適している長持ち。明治24（1891)年の火事の際に持ち出したものと伝わる。

胡堂、ふるさとへ帰る

胡堂は明治35（1902）年に盛岡中学を卒業し上京、明治37（1904）年に旧制第一高等学校（現東京大学教養学部）へ入学する。明治40（1907）年には東京帝国大学法学部（現東京大学法学部）へ進学。父長四郎からは医者になることを嘱望されていたが、本人の希望と折り合わず、法律を学ぶことになる。その後、東京の岩手県人会で同郷出身の橋本ハナと再会し、学生結婚するも、明治43（1910）年に父長四郎が急死したことで、大学を除籍されてしまう。生活のため、胡堂は報知社（後の報知新聞社)へ就職し、新聞記者としての道を歩み始める。

20歳で上京して以来、東京が生活の中心であった胡堂だが、ふるさとの家族とは手紙のやりとりを頻繁に行い、また折に触れて帰省し、故郷の人々との交流は続いていた。

大正９（1920）年の３月29日から４月４日まで、胡堂は妻ハナと３人の子供たちを伴って一家そろって郷里へ帰省する。ハナにとっては約11年ぶりとなる帰省だった。この帰省の際に故郷の様子や家族で巡った思い出の場所、ふるさとの人々とのやり取りを詳細に記した旅行記が残っている。表紙に「故郷への旅」と記されたこの帳面は、幼い子供たちや故郷への温かな眼差しを感じられる。また、当時の大巻・彦部地区の様子や習俗を窺い知れる、地域にとっても貴重な記録でもある。

野村家家族写真
大正12（1923）年
後列左端胡堂、左から4人目耕次郎、右端ハナ、前列左から淳子、耕一（耕次郎長男）、瓊子、稔子、一彦、琴（耕次郎長女）

衝　立
左の家族写真に写っている衝立と同じものと思われる。「故郷への旅」にも、「貼り交ぜの古い衝立」と記されている。【個人蔵】

夕食前
お茶の間にて
昭和13（1938）年10月3日

稔子（右）と美恵子
墓参の花を手にして
昭和13(1938)年7月17日

野村胡堂記　旅行記「故郷への旅」
大正9（1920）年12月17日

大正10（1921）年に撮影された胡堂一家の家族写真
前列左からハナ、瓊子、胡堂、一彦、淳。
後列左から章（胡堂末弟）、ぬい（お手伝いさん）、稔子。
「故郷への旅」に収められている。

大正九年三月三十日

半晴、半曇

花巻、花巻、それはお花には忘れ難い名の一つであった。二十年前、お下げにして、赤い袴を穿いて、此処の小学校に通って居た頃の淋しい記憶は、幾度かお花の甘い涙に溶け込んだか知れない。黒い木立と、赤い崖と、白い磧が表象する花巻は、今あわたゞしく眼の前に展べられて居るのだ。お花の眼に輝く感激は、二十年後に斯うして子供達の胸にやさしく蘇って行くのであろう。淡い悲愁が、「故郷に近づく歓喜」の上に一抹の陰影を曳いて又散った。

もう支度をしなければならぬ。荷物を調べたり、子供達の服装を整えたり、

「忘れ物は無いか」

幾度もこんな言葉はくり返された。

石鳥谷も過ぎた。

「此次だぞ」

と号令をかける。皆立ち上がった。期待に胸躍らせて、

「此森を出ると、もう**日詰の停車場**が見えるのよ」

とお花は教えて居る。

「叔父さん達が出て居るでしょう」

とも言った。

子供達は窓口を争い乍ら、夢中になって何んかを見つけ様と犇めき合った。明るい故郷の山川は、次第に旧知らしい懐かしさで眼界に入って来た。田舎家を飛び飛びにあしらった曠い水田の尽くる所に、紫色に霞んだ**袴腰**（東根山）や**南昌山**も見える。右手には北上川を隔てゝ遥に故郷の村が、**黒石山**を背景に、一瞬毎に其姿を変えて行く――、鼻の先をシグナルの柱が飛んだ。

「そら着くぞ」

荷物と子供達をサイドブリッヂに出して扉を開けると、汽車はもうプラットホームに入りかゝって居る。

怪し気なプラットホームの待合室には一団の群集が動揺みを打って居る。其中から一人の男が、帽子を振って鉄砲丸の様に飛び出した。

「章だ章だ、章叔父ちゃんだよ」

章は汽車と反対に駆けて、今度は汽車と一緒に駆けて扉の外で「ヤアヤア」と言い乍ら汽車が止まり切る迄駆けて居た。一彦は嬉しがって、一番先に飛び出した。淳子はモジモジし乍らそれに続いた。瓊子とお花も降りた。

大正九年四月四日

小雨後晴

篭の空地や鞍の上には、荷物が山の様に積まれ、更に残った荷物は一と纏めにして耕次郎が背負ってくれた。子供等の乗った馬を先頭に、

「左様なら左様なら」

と、私等は最後の別れを告げて門口へ出た。母上とお時は其処まで送って出て、

「みんな丈夫で暮せよ」

と言って居る。私は二十年前、始めて**東京**へ遊学に出た時の様に、何と無く「**門出**」らしい改まった気分になった。（中略）

斯うして私等は、六日間滞在した**故郷の土**を離れた。

停車場へ来て見ると、九時何分かの汽車に未だ大分間があった。耕次郎が背負って来てくれた大荷物を鉄道便で上野へ出して居ると、子供等の乗った馬が、停車場の前に着いた。私やお花が出て行くと、子供等が荷篭の中から

「ヤアー面白かった」

と踊り出し相にして居る。順々に出してやると、一彦などは未だ馬の側に吸ひ付いて

「ネ、ネ、お母様、それあ面白かったよ」

と鼻の先を赤くして喜んで居る。積んで来た荷物は、**待合室**の卓の上に移された。汽車の時間の近づく共に、段々増えて行く人達は、私等一行の上に好奇の眼をかがやかしてして居る。（中略）

汽車はエライ勢で私の面前へ来た。併し短距離を運転する小さい汽車は、三つ四つの三等車を持って居るに過ぎなかった。（中略）

「此処が宜い宜い」

と誰かゞ叫んだ。私とお花は三人の子供等を連れて、其車に無理に入り込むと、其後から押し込める様に扉が占められた、汽車はもう動き出して居る。

「左様なら左様なら」

私とお花は窓から挨拶し乍ら、外から耕次郎や西の主人が渡してくれる荷物を受取った。而して窓口から最後の一瞥を投げて、後ろに遠退く兄上や耕次郎や敏雄さん兄弟へ目礼した。

漸く車内に落付いて見ると、何やら斯うやら腰を下す空席はあった。汽車はもう**日詰**裏から**七久保の陸橋**の下へ差かゝって居る、淳子も瓊子も、一彦も、窓に獅噛み付いて四方の景色を見とれて居る。

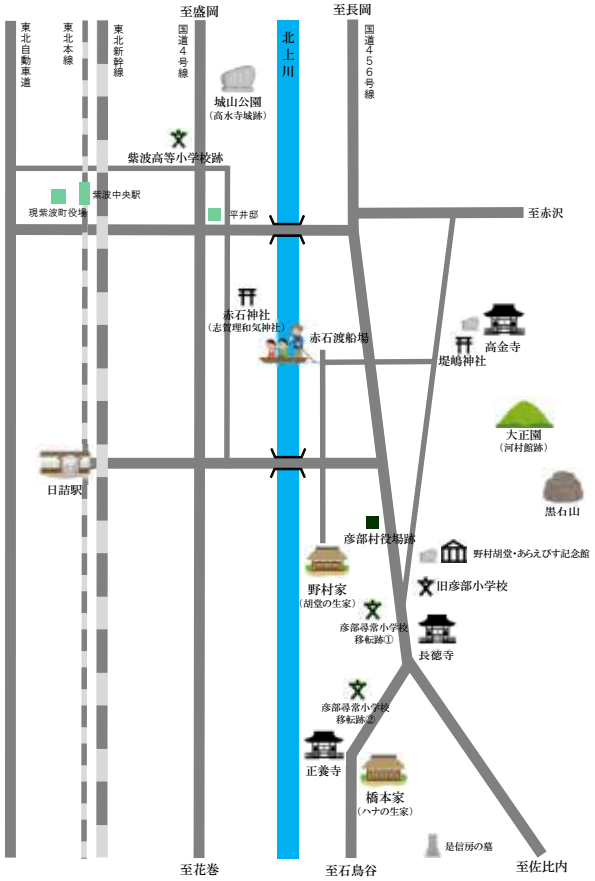
私等と一緒に**盛岡**へ出る筈の章は、隣りの箱に乗って、一彦にいろいろな事を教へて居た。**城山**も見える、**陣ケ岡**も見える、私に取っても此辺り一帯の景色は何となくなつかしい所であった。

胡堂、思い出の場所とふるさとの人々

胡堂はふるさとに関わる随筆をいくつか書いている。そこにはふるさとの思い出の場所や、幼少期のエピソードが記されており、故郷を懐かしく思う胡堂の気持ちが込められている。

胡堂にとって、現在もその名残を残す思い出の場所がある。思い出の場所にまつわる胡堂自身が記したエピソードを紹介する。

野村耕次郎一家
昭和13～14（1938～1939）年５月頃カ
胡堂の弟、耕次郎一家の集合写真。胡堂生家の作業小屋前で撮影されたものと思われる。【個人蔵】



■野村胡堂生家・土蔵

上／記念館から望む胡堂生家

左／胡堂が幼少期、読書に夢中になって籠っていた土蔵

野村胡堂が生まれ育った家。胡堂が９歳の時、火事で母屋が全焼。明治15(1882)年築の土蔵は無事だった。敷地内には胡堂の幼少期からあるサグミの木も残っている。
※一般公開はしていない。

家の入口の右に小屋があり、夜業をしたり、簡単な作業をし、穀物を納めて置いたりした。左には土蔵が二つ。小屋と土蔵の間を通った奥が住まいである。

奥行九間、長さ十一間。約百坪の住まい。窓のついた中二階の家であった。

入口を入ると土間で、右が厩、反対側に大きな炉が切ってある。炉の脇に内井戸があり、お勝手は二十二帖の広さ。一段高くなって座敷になり、半分畳敷で、仏壇もそこにある。右側に四帖半が二つ並び、突当りが六畳、八畳、十二畳と部屋が並び、回り縁がこの部屋の前に伸びていた。

父が村長をしていたのでしばしば人寄せも多く、広い部屋も必要だったのだろう。

とにかく、一口にいえば、床が高くて、がっちりと柱も太く、寺院を思わせるように大きな家であった。

野村胡堂「岩手の民家」より

■赤石渡船場

左／昭和10年頃の赤石渡船場跡（個人蔵）
北上川東岸から紫波橋と城山方面を望む。

右／現在の赤石渡船場跡からの眺望
北上川東岸から紫波南大橋と赤石方面を望む。

北上川を挟んだ赤石・大巻間をつないだ渡船場。地域にとって欠かせない移動手段だった。明治23(1890)年、東北本線が開通し、日詰駅への移動手段として利用者数が増加するも、バスや自家用車普及による利用者の減少、船頭の高齢化・後継者問題から昭和49（1974）年３月に廃止となった。

広い美しい川は、二十年前と一毫も変った風が見えない、対岸の古朴な渡し小屋も、其下の崖も、薮も木立も、真に其儘だ。
「お父様が子供の時は、毎日此川を船で越して小学校へ通ったものだ」
という様な事も話した。
艫て船が来た、瓊子を抱いて飛乗ると、一彦も淳子もキャッキャッ騒ぎ乍ら続く、渡し舟は一彦と瓊子には新しい経験の一つであった。
水馴棹に従って舟は急流を滑り出る、
「ヤア底が見える、綺麗だナア」
「此川は深いの」
子供等はこんな質問を連発する。（中略）
頬冠りを取って挨拶する船頭も、昔男の一人であった、私が小学校に通って居る頃、家へ帰るのも忘れて、此川で夕方まで泳ぎ廻って、よく小言を言はれる事などもあった、岩も淵も瀬も、此辺一帯は今でも手に取る様に知って居る。

野村胡堂「故郷への旅」より

■高金寺（野村家菩提寺）

右／高金寺参道にて
　昭和11(1936)年、帰省時の墓参で撮影。
左／高金寺境内に建立された胡堂の句碑

曹洞宗養龍山高金寺。野村家代々の墓所には分骨された胡堂・ハナ夫妻、長女淳、長男一彦の墓がある。胡堂は帰省の折には墓参を欠かさなかったという。

お寺の玄関から本堂に入ると、正面の壇の上にはもう薄明るく蝋燭が灯されて居た。私と耕次郎とお花は、庫裡へ行って挨拶したが、住職は旅行中な相で、隣村の長徳寺の若い住職が其代りに来て居た。又本堂に引き返すと子供等は、面白相にいろいろな奉納の額を見廻って居た。（中略）

「御父様が小さい時はこの鐘の音が怖くて何うしても本堂へ来られなかった」

と言うふと一彦は、章と一緒に、撞木でその鐘を軽く叩いて首を捻って居る。お盆のお寺詣りの時、あの鐘の唸る様な音が恐ろしさに、私は駄々を捏ねて、庫裡で母上の懐に顔を埋めて居たものだ。此寺の先代の婦人は、大きな菓子を持って来て、気長に私をあやしてくれる事もあったが、私は到頭本堂へ行く気にはなれなかった、其処には唸る鐘の外に、廊下の上に恐ろしい地獄の絵も懸って居た。

野村胡堂「故郷への旅」より

■堤島神社

現在唯一残った大島
鳥居とお堂が残っている。

昭和30年頃の弁天堤
（個人蔵）
南側から堤を望む。右手側に現在の堤島神社社殿、高金寺が位置する。

寛文３(1663)年に灌漑用の溜池として整備された「大巻堤」（弁天堤）。堤の中に三つの島が造られ、そのひとつに弁財天が祀られた。大正時代には、堤の土手に桜が植えられ桜の名所となったが、昭和44(1969)年に区画整理事業のため、水田に整備され現在に至る。

堤を上り切ると、弁天の池が眼下に展べられた。東に鎮守の黒い森を背負って、岩丈な堤で繞らされた方数丁の池には、水は冬枯のまゝ半分位しか入って居ない。真っ北の辺に遠く遠く田園のパノラマを隔てゝ冬の姿の岩手山も見える。

「ヤア池？」

と子供等は立止まった。東京の子供等の、好奇心を満足させる為に、一行の人々も多くは霧雨の中に立止って見慣れた＝＝併もそれは何時も美しい＝＝景色を眺め入った。

「お父様お父様島が二つあるでしょう」

と一彦は大発見でもした様に指した。

「ああ二つあるよ、お父様が小さい時、此池で泳いだ事もあったよ、一度なんかあの島へ行って鳥の巣を取ろうと思ったら、水草に足をからまれてヒドい目にあった事もあるよ」

私は二十何年前の夏の日の午後を思ひ浮べて話したりした、「弁天の堤」は子供心には日本一の美しい景色の様に思って居たものだ。

野村胡堂「故郷への旅」より

■黒石山

赤沢村との境界に位置する山。標高279m、彦部村内では一番高い山。

明治以前は修験者（山伏）の修行の場だった。山頂にある大岩は、信仰対象であり、「黒石大権現」と称された。胡堂は「屏風岩」と呼んだ。

私等三人の冒険少年は暮れ坪の方から登って行った。焼け野を過ぎて道の無い草叢を越え、森を縫ったり、林を抜けたり、幾つかの峰を越して段々絶頂に近いた、そして山角に立つ毎に、私等は大きな声で軍歌を怒鳴った。

快い汗に額をぬらして頂上屏風岩に着いたのは丁度昼頃であった。それは美しく晴れた春の日で、振り返ると眼下に彦部の全村がパノラマが展られた様に、北上川が銀の帯の様に緩やかにそれを抱いて、紫色の森の中へ消えて行くのであった、青い麦畑や黒い森の間に配在する小さい小さい屋根を指して、私等は一生懸命に「自分の家」を探した。

絶頂は可成り風が強かった、馬の背の様な岩の間に火を起して、餅を焼き乍ら私等は放談した、話は大抵近い内に行く「中学」の事であった、そして話の合間合間に起ち上って中学のある盛岡の方を眺めて居た。併し盛岡は此処から真っ直に勘定しても五里は隔って居る、煙の様な靄の中に見える白いものは盛岡にしてはあまりに近かった。

野村胡堂「故郷への旅」より

■日詰駅

現在の日詰駅。駅舎は３代目。

JR東日本東北本線の駅。明治23(1890)年11月１日、上野・盛岡間の鉄道完成に伴い日本鉄道の駅として開業。令和２(2020)年に開業130周年を迎えた。胡堂は東京から帰省の際にはこの駅を利用した。

積んで来た荷物は、待合室の卓の上に移された。汽車の時間の近づく共に、段々増えて行く人達は、私等一行の上に好奇の眼をかがやかして居る。子供等はそんな事には一向無頓着であったが、私やお花は変に改まった心持を感じないわけには行かなかった。九時近くなってから、草鞋穿きで、尻を端折った柏屋の兄上が来た。私やお花は、耕次郎や兄上や、西の主人へ、改めて別れの挨拶をする。

私等は章の買った切符を受取って、荷物を一つずつ抱えて、向ふ側のプラットホームへ行った。（中略）

『近い内に又お出やれ』

『エゝもう二三年すれば又帰りますよ』

『荷物に忘れ物は無いか』

『子供等は離れ無い様に』

そんな短い言葉が誰からともなく忙し相に交された。

汽車はエライ勢で私の面前へ来た。併し短距離を運転する小さい汽車は、三つ四つの三等車を持って居るに過ぎなかった、そしてどの客車を覗いても鮨の様に客が詰まって居る。私等は前から後へ、二三度同じ所を駆けた。　野村胡堂「故郷への旅」より

胡堂がふるさとへ残したもの

胡堂は晩年に「私を育んだ彦部の風物に対して村の為に何んの盡（尽）すところも無かった自責の念に堪へない」と書き残しているが、故郷へ多くのものを遺している。

昭和25（1950）年、母校彦部小学校にピアノ購入費を寄付する。このピアノ購入の前に使われていたというオルガンは、彦部村長時代に父長四郎が導入したものであった。

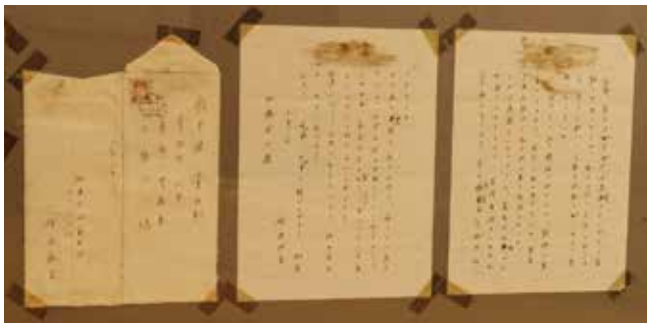
昭和31（1956）年、著書を中心とした蔵書百数十冊を地元の彦部公民館に寄贈、翌年同館に「胡堂文庫」が開設された。

昭和32（1957）年、胡堂はSPレコード約7000枚と蓄音機のコレクション一式を東京都に寄贈した。その後、野村胡堂・あらえびす記念館の開館を翌年に控えた平成６（1994）年、東京都は「あらえびすレコードコレクション」を紫波町へ移管することに決定し、平成７（1995）年２月１日に東京都から紫波町へ寄贈された。

彦部小学校旧蔵ピアノ
彦部小学校で長年使用されたが、グランドピアノ導入により使われなくなったため、平成12(2000)年、野村胡堂・あらえびす記念館に移管された。

最晩年の昭和38（1963）年には、返還義務のない奨学金制度を取り入れた野村学芸財団を設立。経済的な理由で進学をあきらめざるを得なかった多くの学生が利用し、胡堂の郷里岩手の高校・大学生も奨学生に選ばれている。現在までに1300人あまりが給付を受け、今なお引き継がれている。

このように故郷に恩返しをした胡堂は、昭和34（1956）年、77歳の時に紫波町最初の名誉町民に推挙された。また、胡堂の功績を顕彰するため、紫波町内の胡堂ゆかりの場所（城山公園、高金寺、野村胡堂・あらえびす記念館）には石碑が建立されている。平成７（1995）年６月、故郷彦部の、胡堂の生家が見下ろせる高台の土地に野村胡堂・あらえびす記念館が開館、現在に至る。



野村 胡堂書簡　工藤 正一 宛　　昭和31（1956）年11月10日付
胡堂が蔵書を寄附する際、当時彦部小学校校長だった工藤正一氏に宛てた手紙。

拝啓　先日はわざわざ御来東下さいまして有難う御座いました、私も一代の光栄と存じます　岩手日報にて早速御吹聴下さいまして恐縮いたしました、
さて翌日から本の整理に取りかかり、戦後の著書のうちから、百六十冊を選びました、戦前の者や戦中の者は紙も悪く保存も少いので、これは遠慮をいたしました、著書は全部で三百冊にもなりますが、実際寄附するのは百七十冊になります、尚ほ洋音書　その他は取りのぞきました、
その本を三箇の箱にわけて、国もとへ送りました、三、四日中には届くことと存じます、それから、本箱は少し廣くねかひ、あといくらか本が入るやうに致し度いと思ひます、尚ほいろ〳〵御用がありましたら、仰せ付け下され度く存じます、
右まで、　皆々様、御大事に願ひ上げます　敬具
十一月十日　野村胡堂
工藤正一様

岩手日報掲載記事
左　紫波町に「胡堂文庫」 自著二百冊を寄贈　下旬に開館
　　郷人の申し出快諾（昭和31年11月7日付）
右　『胡堂文庫』店開き（昭和32年１月12日付）

胡堂文庫設立を伝える記事と、胡堂文庫が完成した際の新聞記事。胡堂の書簡から、工藤正一彦部小学校校長が岩手日報に情報提供し、掲載記事を胡堂に送ったことがわかる。

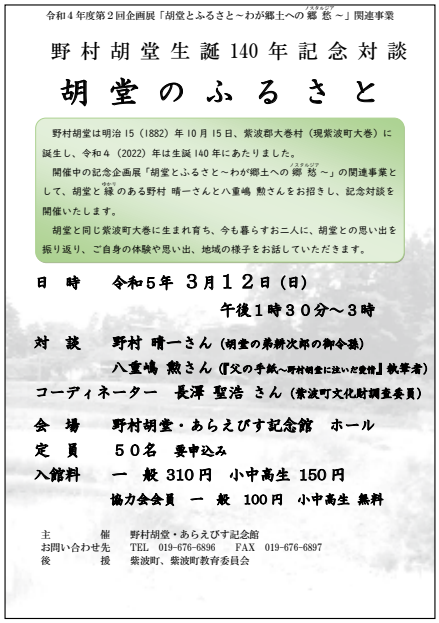
【胡堂文庫設立のいきさつ】

昭和31（1956）年の春、地域から「胡堂文庫」設立の話が起こり、工藤校長らが中心となって発起人会を開催し寄付を集めた。多額の寄付が集まり、同年11月４日工藤校長は上京し、胡堂に「胡堂文庫」の設立を提案し快諾を得た。そして「胡堂文庫」は彦部公民館に設置され、地域の人々に長く親しまれた。のちに紫波町中央公民館、紫波町図書館へと移された。

彦部公民館には、蔵書のほか金文字で「胡堂文庫」と書かれた本棚が寄贈され、現在も公民館で使用している。

関連イベント

野村胡堂生誕140年記念対談「胡堂のふるさと」


令和４年度第２回企画展「胡堂とふるさと～わが郷土への郷愁（ノスタルジア）～」関連事業

野村胡堂生誕140年記念対談

胡堂のふるさと

野村胡堂は明治15（1882）年10月15日、紫波郡大巻村（現紫波町大巻）に誕生し、令和４（2022）年は生誕140年にあたりました。
開催中の記念企画展「胡堂とふるさと～わが郷土への郷愁（ノスタルジア）～」の関連事業として、胡堂と縁（ゆかり）のある野村 晴一さんと八重嶋 勲さんをお招きし、記念対談を開催いたします。
胡堂と同じ紫波町大巻に生まれ育ち、今も暮らすお二人に、胡堂との思い出を振り返り、ご自身の体験や思い出、地域の様子をお話していただきます。

日　時　令和５年 ３月１２日（日）
午後１時３０分～３時
対　談　野村 晴一さん（胡堂の弟耕次郎の御令孫）
八重嶋 勲さん（『父の手紙～野村胡堂に注いだ愛情』執筆者）
コーディネーター　長澤 聖浩 さん（紫波町文化財調査委員）
会　場　野村胡堂・あらえびす記念館　ホール
定　員　５０名　要申込み
入館料　一　般 310円　小中高生 150円
協力会会員　一　般 100円　小中高生 無料
主　催　野村胡堂・あらえびす記念館
お問い合わせ先　TEL 019-676-6896　FAX 019-676-6897
後　援　紫波町、紫波町教育委員会

令和５年３月12日（日）午後１時30分～３時

野村胡堂生誕140年記念企画展「胡堂とふるさと～わが郷土への郷愁（ノスタルジア）～」の関連事業として、胡堂と縁（ゆかり）のある野村晴一さんと八重嶋勲さんをお招きし、地域の歴史に詳しい長澤聖浩さんをコーディネーターとして、記念対談を開催しました。

胡堂と同じ紫波町大巻に生まれ育ち、今も暮らすお三方に、胡堂との思い出を振り返り、ご自身の体験や思い出、地域の様子を話していただきました。

地域の多くの方々が参加してくださいました。皆さん懐かしそうに対談に耳を傾けていらっしゃいました。

対談後には、企画展担当学芸員による展示解説を開催。こちらも多くの方々にご参加いただきました。

出　演　　野村　晴一氏（胡堂の弟耕次郎の御令孫、NPO法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会理事長）
八重嶋　勲氏（『父の手紙～野村胡堂に注いだ愛情』執筆者、NPO法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会副理事長）
コーディネーター　　長澤　聖浩氏（紫波町文化財調査委員）

第２回企画展　野村胡堂生誕140年記念「胡堂とふるさと ～わが郷土への郷愁（ノスタルジア）～」展示目録

No.	資　料　名	年　代	備　考
1	厭蝕太平楽記　十三、十四、十五、十六合巻		野村長四郎蔵書印2ヶ所
2	野村長一彦部尋常小学校卒業証書	明治24(1891)年4月10日	
3	野村長一紫波高等小学校卒業証書	明治29(1896)年3月30日	
4	野村胡堂画「生家土蔵」	大正12(1923)年8月9日	
5	焼失記年標	明治24(1891)年	
6	机	明治時代	
7	車長持ち		ギャラリーにて展示
8	野村胡堂宛野村長四郎・耕次郎書簡	明治37(1904)年6月17日付 同年5月4日付	
9	野村胡堂宛野村耕次郎書簡	明治39(1906)年5月2日付	
10	野村耕次郎宛野村胡堂書簡	明治39(1906)年5月16日付	常設展示室にて展示
11	旅行記「故郷への旅」	大正9(1920)年12月17日	大正9(1920)年3月29日～ 4月5日の帰省記録
12	衝立		個人蔵
13	胡堂画スケッチブック「故郷之写生」	明治41(1908)年7 ～ 9月	
14	写真「野村耕次郎一家」	昭和13～14(1938 ～ 1939)年 5月頃カ	個人蔵
15	野村淳・一彦・瓊子宛野村章書簡	年不明1月18日付	
16	野村耕次郎宛野村胡堂書簡	年不明6月17日付	
17	絵葉書 「彦部村名勝旧跡（第一集）」 「紫波郡彦部村名勝旧跡（第二集）」より	昭和10(1935)年頃	個人蔵
18	工藤正一宛野村胡堂書簡	昭和31(1956)年11月10日付	
19	野村耕次郎宛野村ハナ書簡	昭和38(1963)年1月28日付	
20	「故里を訪れて」書	昭和25(1950)年	常設展示室にて展示
21	彦部小学校旧蔵ピアノ	昭和25(1950)年11月12日 彦部小学校に設置	ギャラリーにて展示

※旧字体は、適宜新字体に直しました。
※展示資料は全て、野村胡堂・あらえびす記念館の所蔵資料です。

寄付者ご芳名

【寄付者ご芳名】（寄贈年月日順）
ご寄付いただきました方々に心より御礼申しあげます。　（令和４年４月１日～令和５年３月31日）

紫波歴史研究会 佐藤観悦様（書籍 / 紫波町）、彦部小学校閉校記念事業実行委員会（書籍 / 紫波町）、
平谷美樹様（著書 / 金ヶ崎町）、森肇様（書籍 / 盛岡市）、内城弘隆様（書籍 / 紫波町）、鎌田大介様（レコード / 盛岡市）、
桑原威夫様（書籍 / 川崎市）、菊池静子様（書籍 / 紫波町）

入館者・運営費・レファレンス及び収蔵資料利用

⑴ 入館者・あらえびすホール貸館状況

年　度	有料入館者数（人）			無料入館者数（人）	入館者総数（人）	ホール貸館（件）
	一　般	子 ど も	団体一般			
令和３年度	1,557	189	29	4,680	6,455	50
令和４年度	1,688	57	188	6,084	8,017	70

⑵ 運営費（千円）

年　度	運営事業費	施設管理費	合　計
令和３年度	13,951	21,545	35,496
令和４年度	14,942	19,384	34,326

⑶ レファレンス対応件数　９件

⑷ 収蔵資料利用許可件数　15 件（68点）

特定非営利活動法人 野村胡堂・あらえびす記念館協力会

野村胡堂・あらえびす記念館協力会は、平成22年４月に特定非営利活動法人としての認証を受け、平成28年４月から野村胡堂・あらえびす記念館の指定管理者に選定され、記念館の事業運営及び施設管理を行っています。胡堂を顕彰する活動を通して「胡堂・あらえびす」の功績を広く地域に知らしめるとともに、文化振興の拠点としての機能を維持し、自主事業を通じて広い年代の方々に芸術・文化に触れる機会を提供しています。

令和４年度主な自主事業実績

項　目　名	主　　な　　内　　容	開催月日	参加者人数
コンサート	読売新聞共催あらえびすレコードコンサート	R4. 10. 2	42 人
	不来方高校音楽部コンサート	R5. 2. 23	100 人
イベント	バスツアー（会員限定） ～朝ドラ「おかえりモネ」の舞台　気仙沼市と登米町～	R4. 6. 27	19 人
	ふしぎの世界　昆虫と科学	R4. 7. 23	89 人
	夏休み子ども映画上映会	R4. 7. 27 ～ 31	129 人
	キッズフェスティバル（令和河東会共催）	R4. 9. 17	784 人
	冬休み子ども映画上映会	R5. 1. 7 ～ 9	57 人

施設の利用案内

1 開館時間

午前９時～午後４時30分
ただし、入館は午後４時まで

2 休館日

毎週月曜日（祝日の場合その翌日）
年末年始　（12月28日～１月４日）

3 入館料

個人入館料：一般 /310円　小・中・高生 /150円
団体入館料：一般 /260円　小・中・高生 /100円
※団体入館料は20人以上

4 あらえびすホール

■概要

収容　　最大120席（イスは可動式）187平方メートル
設備　　ピアノ１台、可動式ステージ、スポットライト、大型スクリーン、プロジェクター使用可能
利用時間　９：00～17：00
（事情によっては21：00まで利用可：要相談）

■使用料（１時間毎）

区分	入場料		無料		有料	
内訳	申請者住所又は職場		紫波町内	町外	紫波町内	町外
	普通使用料		280円	840円	420円	980円
	設備使用料		523円	523円	523円	523円
	特別使用料	冷房料	320円	320円	320円	320円
		暖房料	292円	292円	292円	292円
冷暖房無しの場合			800円	1,360円	1,240円	1,500円
夏期：冷房使用の場合			1,120円	1,680円	1,260円	1,820円
冬期：暖房使用の場合			1,090円	1,650円	1,230円	1,790円

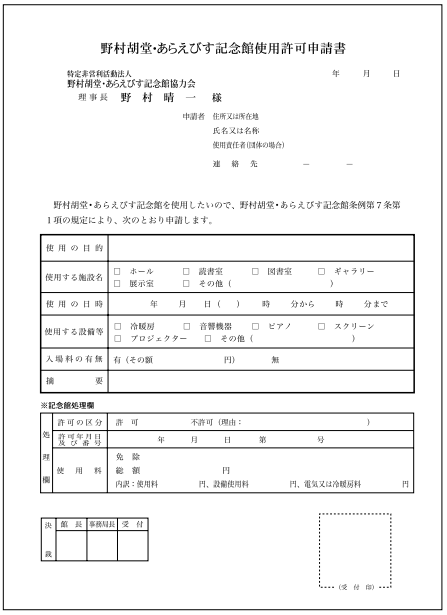
※合計使用料額は10円未満切捨て

5 各種申請手続き及び様式

■あらえびすホール申請手続き

野村胡堂・あらえびす記念館条例第７条(入館等)に基づき、占有的に使用又は利用する場合は、使用許可申請書（別紙様式１）を記念館に提出すること。

様式１



野村胡堂・あらえびす記念館使用許可申請書

年　月　日

特定非営利活動法人
野村胡堂・あらえびす記念館協力会
理事長　野　村　晴　一　様

申請者　住所又は所在地
氏名又は名称
使用責任者(団体の場合)
連　絡　先　　－　　－

野村胡堂・あらえびす記念館を使用したいので、野村胡堂・あらえびす記念館条例第７条第１項の規定により、次のとおり申請します。

使用の目的	
使用する施設名	□ ホール　□ 談書室　□ 図書室　□ ギャラリー □ 展示室　□ その他（　　）
使用の日時	年　月　日（　）　時　分から　時　分まで
使用する設備等	□ 冷暖房　□ 音響機器　□ ピアノ　□ スクリーン □ プロジェクター　□ その他（　　）
入場料の有無	有（その額　　円）　無
摘　要	

※記念館処理欄

免許可	許可の区分	許　可　　不許可（理由：　　）
	許可年月日及び番号	年　月　日　第　号
	使用料	免　除 総　額　　円 内訳：使用料　　円、設備使用料　　円、電気又は冷暖房料　　円

決裁	館長	事務局長	受付

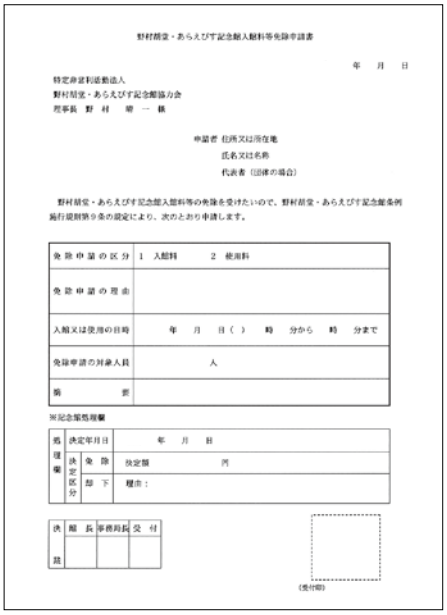
（受付印）

備考　用紙の大きさ　日本工業規格Ａ４

■入館料等の減免及びその手続き

野村胡堂・あらえびす記念館条例第12条(入館料等の減免)に基づき入館料等の減免等を申請する場合は、入館料減免申請書(別紙様式２)を記念館に提出すること。

様式２



野村胡堂・あらえびす記念館入館料等免除申請書

年　月　日

特定非営利活動法人
野村胡堂・あらえびす記念館協力会
理事長　野　村　晴　一　様

申請者　住所又は所在地
氏名又は名称
代表者（団体の場合）

野村胡堂・あらえびす記念館入館料等の免除を受けたいので、野村胡堂・あらえびす記念館条例施行規則第９条の規定により、次のとおり申請します。

免除申請の区分	１　入館料　　２　使用料
免除申請の理由	
入館又は使用の日時	年　月　日（　）　時　分から　時　分まで
免除申請の対象人員	人
摘　要	

※記念館処理欄

処理欄	決定年月日	年　月　日	
	決定区分	免　除	決定額　　円
		却　下	理由：

決裁	館長	事務局長	受付

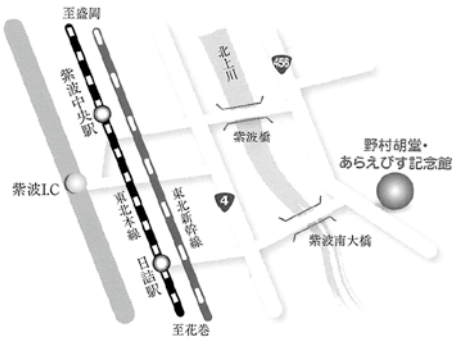
（受付印）

備考　用紙の大きさ　日本工業規格Ａ４

6 交通の御案内

ＪＲ東北本線日詰駅から車で約６分
ＪＲ東北本線紫波中央駅から車で約10分
ＪＲ東北新幹線盛岡駅から車で約40分
ＪＲ東北新幹線新花巻駅から車で約25分
東北自動車道紫波I.Cから車で約15分

7 案内図



令和４年度　野村胡堂・あらえびす記念館　館報

発　行　日　令和５年７月31日
編集・発行　特定非営利活動法人 野村胡堂・あらえびす記念館協力会
（野村胡堂・あらえびす記念館指定管理者）
〒028-3315
岩手県紫波郡紫波町彦部字暮坪193-1
TEL 019-676-6896・FAX 019-676-6897
印　　刷　有限会社 紫波印刷